

千葉 喬三

循環型社会と持続可能な社会



昨年環境講座「環境とは何か」の講座を終えた後、受講された方からいくつかの質問を頂きました。その中に、『循環型社会と持続可能な社会とのちがい。また、持続可能な開発とはどういうものか』、という大変重要なお質問がありました。

これらの用語は、すでに常用語になっています。その常識について、改めて不明や疑念をいただかれ、率直に質問されたことに敬意を表したいと思えます。

循環型社会とはどのような社会なのか？持続可能な社会とは何を指しているのか？持続可能な開発とはどんな開発なのか？少し考えてみれば、その内容を明確に説明し、まして実態を作り出すことは容易でないことに気づきます。

「循環型社会」にはきちっとしたモデルがあります。地球が40数億年

かけて作り上げたシステム—生態系です。この自然生態系におけると同様、人間社会においても、人間社会を構成する物質群が人間の活動全体を通じて過不足、遅滞なく移動し、そして活動に使われた種々のエネルギーが熱として蓄積せず外界へスムーズに放出される、という動的平衡状態が維持されておれば、それが循環型社会です。

しかし、お気づきのように、現実の人間社会では物質もエネルギーも動的平衡状態とは全くかけ離れた移動をしています。「循環型社会」の「循環」は、単なる希望的な思い込み、否、目くらましという意味では、悪質な言葉の濫用、とすらいえます。恐ろしいことは、こんな得体の知れない言葉をあたかも意味があるように使うことで、結果的には意味しようとする「環境が保全されている状態」と全く逆の状態を作り出すことにつながることで。

「持続可能社会」、「持続可能な開発」にいたっては、私にはほとんど理解不能です。これらの用語は、1987年に国連環境開発世界委員会(通称ブルントラント委員会)が「持続可能な開発

(Sustainable Development)」という先進国にとって都合良い、ただただ政治的必要性から提唱された概念ともいえないお題目のようなものから始まったものです。

そもそも「持続」とは何を維持させるというのでしょうか？すべての人間活動は必然的にエントロピー(エネルギーと物質の汚れ)の増大を引き起こします。そして、エントロピーが増大すれば、生命、生産、組織、社会などすべてがその活動が停止する、すなわち「持続」とは真反対の現象を引き起こすのです。このエントロピーを減少させるシステムは、自然生態系を核とする全地球システムしか存在しないのです。大事なことは、その中に現今の人間活動はもともと組み入れられていないのです。従って、「持続可能な社会・開発」などの用語は恣意による言葉の濫用以外何者でもありません。

経済行為を膨らます(すなわち開発)ことで、エントロピーの増大を処理(減少・移動)したように錯覚させることにより、もともとできないことをあたかもできるように見せかけるためのトリックです。

千葉 喬三 氏

1939年生まれ

学校法人就実学園理事長

農学博士(京都大学)

(財)おかやま環境ネットワーク
理事(前理事長)